

月そ～の ふね～を 漕いでゆけ



混合かじ付きフォア7～12位決定戦スタートする日本チーム。左から八尾陽夏、木村由、西岡利拓、有安諒平

次世代選手発掘プログラムから

都など主催 10歳から45歳以下

◆東京都パラアスリート次世代選手発掘プログラム 国際大会等で活躍する選手輩出や、競技との出会いをサポートすることなどを目的に16年に開始。条件は①競技者として継続的に取り組んで国際大会を目指す意思がある②東京都に在住、在学、在勤のいずれか③10歳以上45歳以下の3項目。東京パラリンピック22競技中18競技に加え、冬季競技のスキーや車いすカーリングなども対象。個別相談なども経て適性を見極め、競技選択を行う。東京都と東京都障害者スポーツ協会が主催。



ボート 女子シングルスカル 市川 友美 11位 41=三菱UF Jビジネスパートナー
ボート かじ付きフォア 有安 諒平 12位 34=東急イーライフデザイン
ボート かじ付きフォア 木村 由 12位 17=文京盲学校

パンデミック下の祭典

東京都と東京都障害者スポーツ協会が16年から実施している「東京都パラアスリート次世代選手発掘プログラム」で見いだされた4選手が、東京パラリンピックに初出場している。そのうちの3人が29日、海の森水上競技場でのボート競技で大舞台を体感した。女子シングルスカル(運動機能障害PR1)の市川友美(41=三菱UFJビジネスパートナー)は、12年ロンドン大会の同種目11位だった大竹麻里に並ぶ日本ボート界パラ最高成績。「あっという間に終わっちゃった。大きく動くことはチャレンジ出来たのですが、40点くらい世界の壁を感じました」と満足していない。12年にスノーボード事故で腰椎を骨折し、脊髄を損傷。下半身を動かさず、上半身だけでオールをこぐ。一時は目標も失っていたが「ボスターを目にしていなかったらチャレンジしていなかった」と発掘事業が転機となった。今大会中、中学以来となる友人を含む激励メッセージが次々とSNSに届いた。市川は自国開催の影響力や経験に感謝するとともに、3年後のパリ大会出場へ向け、世界7位以内を目標に掲げた。

混合かじ付きフォア(運動機能障害・視覚障害PR3)の有安諒平(34=東急イーライフデザイン)は、柔道で磨いた腕力で5人乗りクルーの中心を担った。最下位12位だったレース後は悔しさと仲間

との苦楽に感情があふれて涙。17歳で黄斑ジストロフィーを発症して視力が低下したが、現在は大学院で神経生理学を研究し、理学療法士も務める。「ボートに出会えてラッキーだった。今後のパラボート発展にも非常に重要な一歩目を踏み出した」。22年北京冬季パラリンピックでもクロスカントリースキーで出場権獲得に挑む。視覚障がいのある木村由(ゆい、17=文京盲学校)も「みんなまで1つになれた。パリにつなげる」と前を向いた。

パリパラも漕ぎ出す!!



【鎌田直秀】